



音楽家のための サバイバル講座

VOL.1 音楽家としての見せ方

～いかに自分を社会にデビューさせるか～

- 講師:石田 麻子
(昭和音楽大学教授、学長補佐、東京藝術大学大学院音楽研究科非常勤講師)
- ファシリテーター:池谷 歩(クラリネット奏者)



石田麻子さんに「音楽と生きる」ために必要となる演奏・指導・経営といった複数の視点から活動しキャリア形成を目指す、ポートフォリオキャリアの重要性をお話しいただきました。また、この先10年間を見つめ目的に向かい具体的な目標を設定する、シナリオ・プランニングを参加者と共に考えていただいたり、ワークショップを通じて参加者へプロフィールの書き方、SNSの活用方法を個別にアドバイスをいただいたりと、非常に実践的な内容となりました。特に、自身の強みやできることを簡潔に13文字～14文字で表すことで、売り込むためのプロフィールに活用できるというお話は、表現活動をしている方ならどなたでも、今すぐ実践できる「見せ方」の1つではないでしょうか。

ファシリテーター 池谷 歩さんより

今日、フリーランスは、音楽家の世界だけにとどまらず、世の中で増えてきたと感じます。本来の主軸となる『演奏』だけでなく、さまざまなことを個人で進めていかなければなりません。石田先生が日本語版監修に関わられた『クラシック音楽家のためのセルフマネジメント・ハンドブック』に出会えたこと、先生からプロフィールについてのアドバイスやこれから10年についてのお話をいただいたことにより、自分に必要なものがより明確になったと感じています。これは『若手』だけでなく、誰にでも必要なアップデート作業であるということを痛感しました。

VOL.2 音楽家としての基盤づくり

～応援者をいかに得るか～

- 講師:荻原 忠浩
(広島ウインドオーケストラ 統括プロデューサー)
- ファシリテーター:伊藤 梨恵子(フルート奏者)



荻原忠浩さんが統括プロデューサーを務める「広島ウインドオーケストラ」の歩みを紐解きながら、地域で活動する音楽家として重要である、地域の人々との関係構築や、その地域に適した客層のターゲット設定などをお話しいただきました。ゆかりある地域で長らく活動していく中、人と人とのつながりや縁を大切にしつつ、何をすべきかを常に考え活動し続けることで同じ志を持つ仲間や応援者を得てきたとのお話は、浜松で活動する方にもヒントとなる内容でした。さらに、荻原さんの「演奏を通じてファンを獲得するだけではなく『音楽を聴く人』を育てる、増やしていく」という視点が今必要であるとのお言葉は、参加された方々の心に深く響いたようです。

ファシリテーター 伊藤 梨恵子さんより

どんな形であれ音楽の世界で「生きてく為」に必要な力は、演奏力だけではないと日頃から感じておりました。さまざまな経験からスキルを得ることはできますが、自身の活動を更に発展させていくにはどうしたら良いか、コロナ禍により一層考える事が多くなつたように思います。また、私の住む「地方都市での活動」について仲間とも悩むこともあります。悩みはつきませんが、今回地方都市にいながら発展し続け、存在感を放つ団体をまとめ上げる、荻原さんの実践的なお話を皆様と共に学びたいという思いで務めさせていただきました。

10月7日、10月20日、11月1日の全3回にわたって、セルフマネジメントやセルフプロデュースを学び大学等の専門機関で得た技術や知識をどのように社会にアウトプットするのか、また、音楽家としてどのように生き抜いていくのかを学ぶ講座を開催しました。当日の様子をご紹介します。



VOL.3 音楽家として社会に何を伝えていくか

～音楽家として生きていくために～

- 講師:雲井 雅人(サクソフォン奏者、国立音楽大学教授)
- ファシリテーター:小久保 まい(ユーフォニアム奏者)



雲井雅人さんから、「音は音楽家の命」という信念のもと、音楽人生で実践してきた独自の練習方法や、ご自身の「音づくり」を主にお話しいただきました。サクソフォン奏者でありながら、常に既存の練習法にとらわれず、フルートや声楽のメソッドを取り入れた練習法の実演に参加者の関心が集まっていました。演奏技術のみならず、日々幅広い分野に対して興味を持って多方面から知識を学んでいくことで、演奏に活用できる思いがけない発見があるかもしれません。講座終了後には雲井さんより「天才たちが書いた音楽を良い音で再現することを普段から考えていて、そのことをもって社会と繋がるしか自分にはできないと感じています。」というコメントもいただきました。

ファシリテーター 小久保 まいさんより

「君は僕を神格化しちゃってる。それじゃ講座がうまくいかないよ。」この言葉は初打ち合戦の際、「あなたの大ファンなのだ」と熱弁した私に、雲井雅人先生が放った一言です。「僕の言葉をなんでもただ正しいと思っていたらいけない」とのこと。この言葉と講座内容からも分かるように、プロとして生き残るには、常に何かを疑問に思ったり答えを探し続けたりしなければならない事を教えて頂きました。64歳になつても挑戦をやめない雲井先生が我々の目の前を爆進している…雲井先生と同じ時代に生まれたことに感謝します。



今回の講座では、「音楽家のためのサバイバル講座」と題打ち、3回にわたり、音楽家としての「見せ方」「自己プロデュース」に関して、地域での応援者の獲得について、音楽家として社会へ伝えられることについて、講師の方々にお話いただきました。各回の講師・ファシリテーターの方々にお話しいただいた内容はいずれも、音楽活動だけでなく表現する方ならどなたでも参考になるものでした。ご参加いただけなかった方にもぜひ、この記事を通して少しでも今後の活動の参考をしていただければ幸いです。

浜松アーツ&クリエイションでは、今後も様々な表現活動をされている方々を対象に活動の指針やヒントを得られるような講座を開催していきます。個別の相談も常時受け付けていますので、お気軽にお尋ねください。

次回は、1月22日(土)に市内で活動されている方の中でも悩みの種となりがちな資金調達にスポットを当てた講座『『想い』をカタチにする～プロジェクトを実現する資金調達～』を開催します。入門編ですので、これから活動を始めたい方にもおすすめできる講座です。翌週29日(土)には、「土地の力を引き出すデザイン～コミュニケーションのスイッチの入れ方～」を開催します。こちらはデザインの力を活かして浜松の魅力を引き出すアイデアや気づきを成功事例から学ぶ講座となっております。詳細は裏面をご覧ください。

(漆造形家) の視点

漆は、ウルシの木から取れる樹液で、縄文時代から天然の塗料として現代に至るまで使われ続けています。漆芸の技術とデザイン性は西洋からも愛され、漆はJapanと称されました。今日においても世界中の多くの人々を魅了し続けています。

漆塗りの制作工程は、その華やかな見た目とは違って、塗って研いでをひたすら繰り返すとても地味な作業の積み重ねです。塗った漆はすぐには固まらないため、1つの作品が出来上がるまでには多くの手間と時間がかかります。

漆の塗膜を見ていると、その漆黒の世界には吸い込まれるような魅力と力強さを感じます。漆は、樹木から生まれた自然の美しさを湛えており、透き通る塗膜の表情はえも言われぬ緊張感を生み出してくれます。液体状の漆を塗布する瞬間、そして硬化した塗膜を研磨す

る瞬間、刻一刻と表情が移り変わり、漆が自分と一緒に呼吸をしているようです。

複雑な工程や膨大な作業量を厭わず、先人たちが工芸素材として使い続けてきたのは、この自然の恵みに魅力を感じていたからなのでしょう。

永く伝えられてきた技術を、今、自分はどう扱うべきなのか。現代における漆の新たななかたちを模索し続けながら素材と向き合う日々です。



小田 伊織 *Nori Oda*

1984年千葉県生まれ。陶芸家の両親の元育つ。東京藝術大学大学院美術研究科工芸専攻漆芸分野修了。個展、グループ展を中心に活動。2019年より静岡文化芸術大学デザイン学部講師。
[HP]odaoriori.com

講座

浜松アーツ&クリエイション

市民活動支援セミナー

1.22
土
14:00~16:30

「想い」をカタチにする

～プロジェクトを実現する資金調達～

講師 | 山田 心

会場 | アクトシティ浜松 音楽工房ホール

定員 | 第一部(講座) 50名程度

第二部(ワークショップ) ... 10名程度

1.29
土
13:30~15:30

土地の力を引き出すデザイン

～コミュニケーションのスイッチの入れ方～

講師 | 梅原 真

会場 | FUSE

定員 | 50名

[参加費] 無料

[申込方法] 浜松アーツ&クリエイションのホームページよりお申し込みください。

今号の表紙



太田絵里子 profile

1987年、静岡県浜松市生まれ。広島市立大学大学院芸術学研究科造形芸術専攻修了。創画会会友。現在は広島を拠点に個展などで作品を発表している。

画材は和紙に岩絵具といった日本画材と呼ばれるものを使用し、人物や好きな模様、スケッチなどで得た形を組み合わせて絵にしている。

[HP]<https://www.otaeriko.com>

[Instagram][@ota.eriko_nitijou](https://www.instagram.com/ota.eriko_nitijou) https://www.instagram.com/ota.eriko_nitijou

制作者

太田絵里子 (画家)

表紙テーマ

レジリエンス

作品制作にあたって

横風に揺られながらも、ぶれない意志を持って進む女性をイメージして描きました。

背景と洋服にあてがった矢絣文様は、破魔矢の羽根がデザインされたもので「邪気や厄災を払い幸せを射抜く」という吉祥の意味を持つので、絵のイメージに丁度良いと考えて組み合わせてみました。

テーマ選定理由

10~11月に開催しました「音楽家のためのサバイバル講座」。音楽家の方をはじめ、音楽業界の方など、多くの方に参加いただきました。全3回の講座では、多彩な顔ぶれの方が講師を務めてくださいましたが、第1回の講座で石田麻子先生が仰った「コロナ禍だからこそ、レジリエンス(柳のようなしなやかな強さ)が必要では」という言葉がとても印象に残っています。私達も柳のようにしなやかで強くありたいと願い、テーマに選びました。

(浜松アーツ&クリエイション事務局)